

『わかちえない痛み、でした。』

みんなには、痛みがあるのです。

古代も、昔も、今も、未来も、みんなみんな痛いのです。

僕にはそれもないのです。

理解することはないのです。

それでいいと、最近は思っているのです。

痛みが、みんなを、

特別だと証明するのです。

誰かのせいにしたかったです。

けれどもすべて、僕のせいにしていました。

弱さも、優しさも、全部無かったです。

うまく言うことは叶わないのです。

狂しいのは本当で、それも嘘になって、何も口から出ないのです。

そのうち、考えるのをやめると言われるのです。

僕は僕を想いつつ、みんなを想いつつ、

結局、誰も想ってはいないのです。

最後には、人ではなかったのです。

暗いのに明るい、奇妙な改竄が見えるのです。

みんなにできることは、僕が消えることなのです。

僕がいなくなれば、誰かのためというのも無くなるのです。

ずっと、ずっと、ずっと消えたいのです。

それなのに、消えさせてくれないのです。

どこかもう、誰もいないところに生きたいのです。

そこでひっそりと、苔の一部になりたいのです。

風の音を気聞きたいのです。

空の冷たさを感じたいのです。

涙は、出ないのでした。

世界があるようで無いからでした。

考えているようで無いようで、誰かにもらったものだからでした。

頑張っているのに、そのせい余計にみんなを狂しめるのです。

頑張らないと、それはそれでみんなを狂しめるのです。

僕には何ができるのですか？

教えてください。

それだけをやりたかったのです。

やっぱり、

僕には穴が空いているのです。

語尾は崩れて――

わかちえない痛みを、

特別だという証明書を使って、

穴に抜け道を創りましょう。

そしたら、勾玉が見えるでしょう。

トグルが見えるでしょう。

樹につく葉の一枚一枚が――

「真友たち」が、

見えた

でしょう。

---

わかちえない痛み、でした。

2022年8月4日 執筆

著者 やさかれい  
八坂 零

掲載 芸術の星座

---